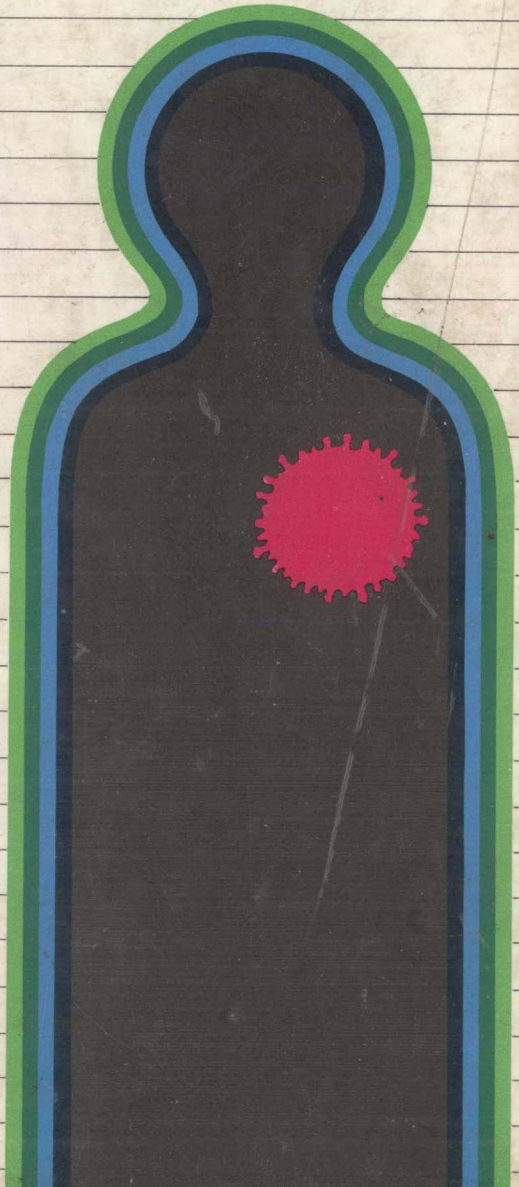
影の座標 海渡英祐



影の座標

海渡英祐

影の座標

昭和四十三年九月二十八日　第一刷発行

著　者　海渡英祐
発行者　野間省一
発行所　株式会社講談社
東京都文京区音羽二丁目一二一
郵便番号　一一二
電　話　東京（942）一一一一（大代表）
振　替　東京三九三〇
印刷所　慶昌堂印刷株式会社
製本所　株式会社大進堂
定　価　三九〇円

落丁本・乱丁本はお取り替えいたします。
© 海渡英祐　昭和四十三年

Printed in Japan

目　　次

1　レーンとワトスン　5
2　社長への尋問　16
3　土曜日の失踪　27
4　午後の調査　39
5　無意味の意味　55
6　容疑第一号　68
7　第二の事件　82
8　レターとライター　94
9　円の中心　106
10　妄想の根拠　118
11　車の絞首台　131
12　恐怖のあと　143
13　ある慕情　155
14　最後の決め手　168
15　レーンの告発　181
16　ワトスンの挨拶　193

此为试读,需要完整PDF请访问: www.ertongbook.com

長編推理小説

影の座標

装幀　伊藤憲治

1　レーンとワトスン

三月十一日の月曜日は、いつもと同じように始まった。何か変ったことが起りそうな予感は、薬にしたくもなかった。

私は窒息一歩手前の状態で、満員電車から東京駅のホームへ放り出され、マンモス・ビルへむかう人波に押し流され、五階と六階を占めている光和化学株式会社の一角へたどりつく。私の仕事の相棒の石森老人に「おはようございます」と言うと、彼も月曜の朝の決り文句を口にする。

「昨日はどうだったね？」

これは、休日をどう過したか――という一般的な意味ではない。日曜日の競馬はどうだったかという質問なのだ。そこで、私は三度に二度は大きな溜息をつくことになっている。この朝も、私はやはり溜息をついた。

「初めのうちは、取ったり取られたりでしたがね……目黒記念は完敗でしたよ。あれだけ狂われちゃ、どうしようもありませんや」

中山のオケラ街道をテクテク歩いて帰ったときのことを、私はいまさらのように、いまいましい気持で思い浮べる。早春の夕べの風は肌寒く、宴のあとのわびしさのようなものが胸にせまってくる。ついさっきまで、一枚二百円の馬券をぽんぽん買っていたのに、十円の金を使うのも惜しいような気持になってくる……

「そいつは気の毒だったな。僕の方は、いささか稼がせてもらったがね」

老人はやにだらけの歯をむき出して、いかにも嬉しそうに笑った。老人というのは少し酷だろうが、今年いっぱいで停年になるのだし、どことなくじじむさい感じの男なので、私はひそかにそう呼んでいる。彼は、競馬と酒だけが楽しみで生きているという男で、こう純粋に喜びを表現されると、こん畜生という気も起らなくなる。

「まあ、あなたは穴党だから……」

「しかし君、穴党と言っても、ちゃんと根拠はあったんだぜ。ダイパレードは金盃で三着に来ているし、メジロシンゲンはスプリング・ハンデで勝っている。上り馬は買うべしだ。え、そうじゃないか？」

「そりゃまあ、そうですがね……」

競馬なんてものは、あとからはいくらでも理屈はつけら

れる。しかし、オンワードヒル、リュウズキ、ムネヒサなどといった面々に出て来られては、やはりそれらの馬を中心に考えざるを得ない。私が狙っていた穴馬はヒシヤクシンだったが、それだってもし来ていれば、昨秋の目黒記念では二着した馬じゃないか——と言えるところだ。

「来週はうまくやるんだな。懐が淋しいようなら、給料日まで少し融資してやってもいいぜ」

「ええ、どうも……」

私はもう一度溜息をつく。結婚したら、競馬などはやめなければならないだろうな——と、ふと思った。しかし、べつに結婚する相手が決っているわけではない。

それから、私たちは仕事にとりかかった。

石森老と私は社史の編纂を担当していて、そのかたわら、社内報の編集などを手伝っている。うちの社も今年の秋には創業五十周年を迎えるので、それを記念して社史を出すことになったわけだが、その担当者という職務は、どうひいき目に見ても閑職であろう。停年寸前の石森老にとっては、まあ仕方のないポストと言えるかもしれないが、二十八才の私にとっては、あまり名誉な話ではない。

しかし、私は自分でも、サラリーマンとしては落第生だと思う。生来鈍重なたちで、仕事はへまばかりやっているし、如才なく他人と渡りあうという芸当もできない。私はよく、としのわりに古くさいやつだと言われるが、現代のビジネス戦争にはおよそ不むきな人間らしいのだ。サラリーマンなどにはなるべきではなかったのだろうが、といって、特にこれという才能があるとも思えない。われながら、だらしがない話だ。

会社の古い記録の整理をしながら、私は思わず石森老の顔に視線を走らせてしまう。落第生先輩の彼は、もう一種の悟りの境地に達しているのか、いつも何の屈託もなさそうに見える。これも一つの生き方だろうが、私はまだそこまでは割りきれない。しかし、何十年か後には、私もやはりこんなふうになっているのかもしれない。それとも、そこまで行かないうちに、企業合理化の大鉈で、さっさと首をちょんぎられてしまうだろうか。

——まあ、そうなったら、そのときのことだ。それは、自分の生き方を改めて考える、いい機会になるかもしれない——

私は呑気にかまえることに決めて、仕事をつづけた。卓上の電話のベルが鳴り出したのは、それから一時間あまりたってからのことだった。

「稲垣さんですね？　秘書室の北山ですが……」

受話器からは、歯切れのいい言葉がとび出して来た。社長秘書をつとめている北山卓治は、私とは対照的なスポー

ツマン・タイプで、スマートを絵に描いたような青年である。

「社長がお呼びです。すぐ来て下さい」

「社長が……？」

私は眼をむいた。

光和化学は大企業とまでは言えないにしても、技術水準の高さでは定評のある、中堅クラスの会社なのだ。平社員が社長に直々に呼ばれるというのは、やはりめったにあることではなかった。ことに、うちの関根社長は有名なワンマンだから、いつも多忙をきわめていて、つまらぬことでいちいち社員を呼びつけるような暇はないのだ。

私はともかく、すぐ行くと答えて電話を切った。真先に頭に浮んで来た考えは、クビになる日が私の予想よりうんと早く来たのではないか——ということだった。しかし、それこそ平社員のクビを切るのに、社長が直々に申し渡すとも思えない。いったい何事だろう？……社史の編纂について、何か特に指示があるのだろうか？　しかし、それなら私より石森老の方に声がかかるはずだ……

どう考えても、あまりいい話ではなさそうな気がした。私はさすがに落着かない気持で、おっかなびっくり、社長室へ入って行った。部屋の厚い絨毯を踏むと、癪にさわるけれども、やはり全身に緊張感が湧いてくる。だが、そこに雨宮敏行の姿を認めて、私はちょっと意外に思うと同時に、いくらか気が軽くなった。

調査課の雨宮は、私の古い友人——大学はべつだったが、中学、高校を通しての同窓生である。彼は私と違って、見るからに鋭角的な感じの男で、切れすぎるほど切れる頭脳の持ち主だが、どういうものか私とはわりにうまが合うのだ。それはともかく、敏腕な彼といっしょなら、そう悪い話ではないかもしれないと私は思った。もっとも、何故彼と私が呼ばれたかということになると、さっぱり見当がつかなかった。

意外だといえば、私は一礼して社長の関根俊吾の顔を見つめたときも、ちょっと妙な感じを受けた。

社長と言えば、私はいつもライオンを連想する。貫禄のある、おっかない顔つきのライオンだ。実際、ときたま見かける彼は、いかにも仕事の鬼といった、精力的な顔つきで、先代のころにはまだあまり大きくなかった会社を、ここまでに育て上げて来た自信が、満ちあふれているような印象を与えるのだ。

しかし、今日の社長は違っていた。ひどく困ったような重苦しい表情を浮べ、急に老けこんだように、肘掛椅子に深々と身を沈めている。最近は少し血圧が高く、健康状態がやや思わしくないようだ——という噂を小耳にはさんだ

ことはあるが、いまの彼の様子は、そうした肉体的な原因のためばかりだとは思われなかった。

関根俊吾は私の挨拶を受けると、軽くうなずいて、すぐに本題に入って来た。

「稲垣君、君はいま社史の方をやっているそうだが、それには石森君もいることだし、まだ時間的な余裕もあるだろう。しばらくの間、べつな仕事をしてもらいたいのだ。ただし、これは命令ではない。君がいやだと言えば、わしとしては強制はできん」

私は少し薄気味が悪くなった。日頃聞き及んでいる社長のワンマンぶりには、およそ似つかわしくないせりふだったからである。

「いったい……どんなことなのでしょうか？」

「雨宮君といっしょに、ある調査をやってもらいたいのだ。言ってみれば、探偵のような仕事だな」

「探偵……ですか？」

私はぽかんとしてしまった。聞きちがいではないかと思った。この人物が、探偵などという言葉を口にすること自体、ちょっとありそうもないことのような気がしたのである。だがそれと同時に、なるほど雨宮敏行が呼ばれたわけだな——とも思った。探偵のような仕事なら、彼以上の適任者は絶対にいないはずだからだ。ただ、何だって、よりによってこの私が、いっしょに呼ばれたのだろう？……

社長はちょっと身を乗り出すようにして、むずかしい表情を浮べながら言い出した。

「いま、雨宮君に事情を説明していたところなのだがね……実は、岸田君が土曜日の晩以来、行方不明になってしまったのだ」

「岸田さんが……？」

思いがけないことの連続で、私は一瞬、おかしな夢でも見ているのではないかという気になった。

「うむ……一晩家をあけたぐらいなら、男のことだから、どこかで酔い潰れたとか、浮気をしていたとかいうこともあるだろう。しかし、今朝になっても、彼は家へも会社へも姿を見せていない。もともと几帳面なたちの男だけに、これはどう考えても、異常な事態というほかはない」

なるほど、これでは社長が深刻な表情を浮べているのも、もっともだった。何しろ、岸田博は関根俊吾の長女・光子の婿なのである。いまのところは平取締役、研究所次長という肩書きだが、いずれ会社の重鎮におさまることは間違いない人物だ。

もちろん、岸田が三[illegible]社の一員に加わっているのは、姻戚関係のおかげであろう。しかし、彼は技術者、研究者として秀れた能力を持っているし、しかも経

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

営者的センスにも恵まれていて、それにふさわしい力量をそなえていることは否定できない。そういう人物だからこそ、社長が娘の婿にと見込んだのだろうが……

「言うまでもなく、わしは父親として、この事態をたいへん心配している……ただ、彼がわしの一族のものだというだけなら、これはあくまでも私事であって、会社へ持ちこむことではない。しかし、社長というわしの立場からいっても、この問題は放置できない性質のものなのだ」

関根俊吾はちょっと間をおいて、また言葉をつづけた。

「これは極秘のことなので、絶対に他言してもらっては困るが、実はうちの研究所では、岸田君のアイデアで新製品を開発中だった。ある種の工業用薬品で、従来の類似製品よりはるかに応用範囲が広く、しかもうんと安くできる画期的なものだ。その化学的性質などは、君たちにも話すわけにはいかんし、第一、説明したところで理解できんだろう……ともかく、この薬品のことは社内のごく一部のものだけが知っており、NK剤という仮称が与えられている。Nはニューで、Kは光和のK、岸田のKだ。秘密を守るために、わざと化学的な名称を与えるのを避けたわけだがね……」

私はまだ半分夢を見ているような気持だった。雨宮敏行も、無言で社長の言葉に耳を傾けていた。

「NK剤は、研究段階ではいちおうの完成を見ている。あとの仕上げは、岸田君がいなくても、ほかの連中がやってくれるかもしれない。しかし、急に発案者がいなくなってしまっては、やはり大きなマイナスだ。それに、彼は失踪したときに、研究の大切なメモを身につけていたらしいのだ……最近は産業スパイの問題がいろいろ取沙汰されているし、実際、うちの社の秘密もよそに洩れているのではないかと思われるふしも、これまでに多少あったのだ」

雨宮はかすかにうなずいた。私は一度も聞いたことはないが、彼は市場調査などといったありふれた仕事のほかに、あるいはそうした方面の特殊な任務も与えられていたのかもしれない。

「もちろん、いまのところ、岸田君の失踪について軽々しく推定は下せない。しかし、わしがこの件をきわめて重視しているわけは、これでわかっただろう……」

関根俊吾は一息入れて、葉巻に手をのばした。しかし、火をつけようとはしなかった。

「当然の措置として、とりあえず警察へは捜索願いを出しておいた。しかし、殺人事件などと違って、失踪人の捜査となると、警察がどこまで本腰を入れてくれるか、どうも心もとない気がする。といって、ことがことだけに、そこいらの街の私立探偵にも、ちょっと頼むわけにはいかな

い。誰か、そういう方面の才能があって、信用のおけるものはいないかと考えていたとき、雨宮君の名前を出したものがいてな……なるほど彼なら、お父さんの関係で、警察にも顔がきくだろうし……」

私は大きくうなずいた。本人自身が希望したことだとはいえ、雨宮が平凡な会社員などになったのを、私はいまでも惜しいと思っている。彼の父親の猛雄は、かつて警視庁の名警部といわれた男だから、鳶が鷹を生んだという表現は当らないだろうが、鷹が鵬を生んだとでも言えばいいかもしれない。ともかく、彼は一種の天才児だった。

敏行はまだ高校生のころに、ある難事件の重大なヒントを提供して、父親をびっくり仰天させた。それ以来、彼は父親の協力者として、何度も鋭い推理力を発揮してきたのである。もちろん、敏行は決して表面には立たなかったが、父親の部下や私たち友人仲間はこうした事情をよく知っていた。息子自慢の猛雄は、内輪のものには、そのことをべつに隠そうとはしなかったのである。

「まあそういうわけで、雨宮君に岸田君の一件を徹底的に調べてもらうことにしたのだが、この種の仕事は一人ではいろいろと不便なことも多いだろう。そこで、君にその協力者の役をつとめてもらいたいのだ。君を――というのは、雨宮君の方で言い出したことなのだがね……」

「君なら気心も知れているし、推理小説のファンだからその方面の知識もあるしね……それに君は慎重なたちだから、僕が走りすぎたときにはブレーキもかけてくれると思うんだ」

雨宮敏行も言葉をそえた。

なるほど、そういうわけだったのか――と私は思った。あるいはこれには、うだつの上らない私を少しでも認められるようにしてやろうという、雨宮の友情のあらわれもあるのかもしれない。悪くとれば、どうせ刺身のツマのような仕事だから、なるべく暇なやつをということかもしれない。どちらにせよ、私としてはべつに異存はなかった。退屈な社史編纂の仕事にくらべると、こちらの方がどれだけましかわからない。

だが、そうかと言って、この話にぜんぜん抵抗感がなかったわけではない。要するに、これは私に、ワトスンの役をやれということだ。ところが古来、探偵の脇役には、ろくなやつがいないことになっている。

元祖のワトスンは何とも凡庸な好人物で、ときどきホームズがちらちらと解決のヒントをほのめかしても、真相に思いいたることはただの一度だってない始末だ。もっと新しいところで、ペリイ・メイスンものに出て来るポール・ドレークときたひには、もっとひどい。メイスンとデラがしゃ

れた食事を楽しんでいる間、彼はわびしくハンバーガーなぞをかじり、ライセンスを取り上げられはしまいかと年中びくびくしながら、使い走りよろしくとびまわっている。

自惚れかもしれぬが、私はサラリーマンとしては駄目な男でも、それほど知的水準が低いとは思っていない。少くとも、そう思いたくはない。ワトスンをやれといわれて、すなおに喜ぶほどお人好しでもないのだ。

しかし、相手が雨宮ではとても勝負にはならないのもわかりきっている。第一、私一人なら、とてもこんな仕事を引受ける自信もない。頓馬な相棒の役をつとめる方が、よほど気がらくだし分相応というものだろう。そのうちには、私だって多少はいいところを見せることもあるかもしれない。何よりも、時間に束縛されない仕事であるのが、ズボラ人間には魅力である。そんなふうに考えて、私は腹を決めることにした。

「わかりました。やらせていただきます」

私がそう答えたとき、ドアをノックして秘書の北山卓治が部屋に入って来た。

「失礼します……」

彼は社長のそばに歩みより、二言三言、何やら小声でささやいた。関根俊吾はちょっと眉をひそめて一つうなずくと、また私たちの方にむきなおった。

「具体的な点について、もう少し話をしなければならんのだが……どうしても抜けられない用事ができてしまった。三十分……いや、四十分後に、もう一度来てくれたまえ。それまで、二人でよく相談しておいてほしい」

雨宮と私は社長室を出て、ビルの地階にある喫茶店へ行くことにした。私は、勤務時間中に公然とコーヒーを飲みに行くのは悪いものではないな——と思ったが、雨宮の方はちょっぴり憂鬱そうな表情を浮べ、黙って何やら考えこんでいた。そうした彼の様子は、私にとっては、すでにおなじみのものだった。

高校生のころから、雨宮は私たちとおしゃべりをしているときに、急にふっと黙りこんでしまうことがよくあった。ふだんの彼は決して陰気な男ではないのだが、何かの考えに取りつかれると、とたんに自分の世界の中に没入してしまうらしいのだ。たぶんそれは、天才肌の人間の一つの特質なのだろうが、そんなとき私たちは、やっぱり彼は我々とはべつな人間なんだな——と思ったものである。

いつのころからか、私たち仲間うちでは、彼にエラリイ・レーンというニックネームをたてまつっていた。もちろん、エラリイは警部を父親に持つ名探偵エラリイ・クイーンにちなんだものであり、レーンの方は、作家のクイーン

が創造したもう一人の名探偵、ドルリイ・レーンの名を雨宮の雨にひっかけたわけである。この仇名は、学生らしい洒落っ気の産物にすぎないだろうが、こういう横文字の名前を考え出した私たちの心の底には、彼は一種の異邦人なのだという意識が、別世界の男なのだという気持が、あるいはひそんでいたのかもしれない……

「久しぶりに、君が腕をふるう機会が来たわけだな」

地階におりるエレベーターを待ちながら、私は雨宮に声をかけた。父親の警部が停年退職したあとは、彼もしぜん犯罪事件にふれることが少くなっていたからである。

雨宮はちょっと困ったような表情を浮べて、私を見つめた。

「僕にとっては、あまり嬉しい話じゃないな。こんな仕事をするためなら、僕は何も会社員などにはならなかった。さっきも君が来るまえに社長から話があったとき、

——お引き受けいたしますが、一つだけお願いがあります。この事件が解決したら、私を営業の方にでも転属下さるよう、御配慮いただきたいのです——

と、そう言っておいたんだ」

「その点が、どうも僕にはよくわからんのだ。君の持論は聞いているが、それにしても、何故自分の才能を十分に生かそうとしないのか……」

「僕には、探偵としての才能しかないというのかい？」

「いや、そういうわけじゃないが……」

ちょうどその時エレベーターが来て、私たちの会話は、しぜんに中断された。

雨宮敏行が大学の法学部へ進んだとき、私たちは彼がやがて警察三級職試験を受けて、父親のあとをつぐことになるだろうと信じていた。あるいはもう一歩進んで、検事か弁護士になるかもしれないと思った。しかし、彼は法律の勉強がどうも性にあわないらしく、司法試験の難関はとても突破できそうもなかった。そして結局、彼は警察官にもならず、平凡な会社員になって父親をがっかりさせたのである。

——親父を見ていると、警察官なんてつまらん商売だとしか思えないんだ。たしかに立派な職業だろうが、夜も昼もない生活で月給はたかが知れている。停年になれば否応なく放り出されて、つぶしもきかない。かなり上のポストまで進んで、うまく立ちまわれば、けちな政治家ぐらいには転向できるかもしれないけどね——

大学四年のとき、私たちから理由を問われたとき、雨宮はこんなふうに答えたものだった。

——それに、君たちは推理能力、推理能力というけれども、そんなものを必要とする事件なんて、いくらもありゃ

しないんだ。ほとんどの事件はただ根気と、現代の科学鑑識の力とでけりがついてしまう。今日では、名探偵なんてものは、存在価値がないんだよ。警察官になったら、僕は死ぬほど退屈するだけじゃないかと思うな——

たしかに、彼の言うことにも一理はあるように思われた。推理小説の世界ですら、名探偵ものというのは、もうはやらなくなっている。そして、コンピューターに必要なデータを放りこむと、たちまち犯人がわかるという時代も、もうすぐ来るかもしれないのだ。

——推理能力というのは、結局は分析と総合の能力だと僕は思う。もし僕がそういう能力に恵まれているとすれば、それは何も犯罪捜査にだけ役に立つというものではないだろう。今日ではむしろ、財界や経済界でこそ有効なものじゃないだろうか……だから僕は、そういう方面での自分の力をためしてみたいんだ。検事や警察官になるよりも、僕にはもっと大きな野心がある。笑われるかもしれないが、いつかは財界の大物の一人といわれるぐらいになりたいと思っているんだ——

そのとき、私たちは何となく気おされた感じで、冷かすこともできなかった。たしかに彼なら、何かどえらいことをしでかすかもしれないという気がしたのである。

社会人になってからは、雨宮もさすがに、そうした大言壮語は吐かなくなった。しかし、彼の考えはいまでも変りはないらしい。彼が調査課に配属されたときも、私は適任だと思ったが、当人はあまり嬉しくなさそうだった。いまも、やはりそれと同じ気持なのであろう。

「まあ、君自身の気持はべつとして、社長が最適任者を選んだことはたしかだな。ただ、君を推薦したのは、いったい誰なんだろう。お偉ら方の中で、君のむかしのことを知っている人がいるんだろうか？」

喫茶店に入って飲みものを注文してから、私が何気なくそう言うと、雨宮はちょっと当惑したような表情を浮べた。

「それが、どうも和子さんらしいんだ」

「和子さん？　社長のお嬢さんの……？」

関根俊吾には娘が二人いて、社名を一字ずつ取って、上が光子、下が和子と名づけられていることは、社内ではかなりよく知られている。いかにも事業の鬼らしい命名法だが、三人目が生れたら化子（ばけこ）とでもつけただろうか——などと、下らぬ冗談の種にされることもあるのだ。

「君は社長令嬢と知りあいなのかい？」

「いや、佐伯君と和子さんがいっしょのところへ、たまたま僕が同席したことがあってね……そのとき佐伯のやつが、僕のことをだいぶ誇大宣伝したんだ。和子さんは、どうやらその時のことをよくおぼえていたらしい……」

「なるほど、そういうわけか」
私はうなずいた。佐伯達也は関根社長のむかしの親友の息子で、雨宮とは大学時代の同窓である。雨宮はさきにも書いたように、大学での成績はあまりよくなかったが、佐伯の方は秀才タイプのやり手で、いまは営業部の係長をつとめている。正式な婚約はまだらしいが、それを前提にして和子とつきあっているという噂で、ともかくエリート・コースの最先端にいることだけは間違いない。
「まあ、張本人は和子さんより佐伯君ということになるがね……おかげで、厄介な重荷を背負わされてしまったよ」
雨宮は煙草に火をつけると、また考えこむような表情を浮べた。
「君はどう考えているか知らないが、この事件の解決は、そう簡単にはいかないような気がするな。だいたい、いろいろな事件の中で、失踪というのはふつうは軽く見られるけれども、本当はいちばん厄介なものだと僕は思う。例えば殺人なら死体があるわけだし、強盗や窃盗でもそれなりの痕跡が残る。ところが、失踪というやつは捜査の対象自体が消えてしまうんだ。警察の仕事の中で、おそらくいちばん成功率の低いのが家出人の捜査だと思うが、それはあまり熱心にやらないから——というだけの理由ではないはずだ」
「それはたしかに、その通りだろうな」
「失踪というケースについては、いちおう四つの場合が考えられる……第一はもちろん、当人が何かの理由で、自から行方をくらましたという場合だ。第二は、事故死、突然の病死、あるいは自殺などで、死体が発見されなかったり身元が不明だったりした場合に起る現象だ。第三は、他人に強制的にどこかへ連れて行かれた場合——つまり誘拐などだ。そして最悪の事態として、第四に……」
「誰かに殺された場合というわけだな?」
「そう……これについても、もちろん第二の場合と同じような条件がつくわけだが……」
気が進まないなどと言っていても、やはりこうした問題になると、雨宮は水を得た魚のような感じだった。整然とした、少しのすきもないような論法で話を進めてくる。
「いちばん可能性がうすいのは、第二の場合だろうね。岸田さんが自殺するとは思えないし、事故死や行き倒れなら、少くとも東京では死体が見つからないということはなかろう。彼が身元を明らかにするようなものを何一つ身につけていなかったとは、とても考えられないだろう?」
私の言葉に、雨宮はうなずいて、
「まだ僕たちは白紙の状態だから、軽々しく推定は下せないが、いちおうはそう言えるだろうね。ただ、岸田さんは

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com